

麗西の李徴は博學才子類、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南、尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとなかった。いくばくもなく言を退いた後は、故山、讎略に備臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を送つて苦しくなる。李徴は漸く無職に駆られて来た。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊頬の美少年の俤は、何処に求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半は絶望したためでもある。曾て同輩は既に運か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかつたその運中の下命を拜さねばならぬことが、往年の僥才李徴の自尊心を如何に傷けたかは、想像に難くない。彼は快々として楽しむが、任性的な性は鬱々抑え難くなつた。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、遂に発狂した。或夜半、急に顔色を変えて寝床から起ると、何か訳の分らぬことを叫びつゝそのまま下にとび下りて、闇の中へ駆出した。彼は二度と戻つて来なかつた。附近の山野を捜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がどうなつたかを知る者は、誰もなかつた。

聖年、監察御史、陳郡の袁修という者、勅命を奉じて嶺南に使い、途に商於の地に宿つた。次の朝未だ暗い中に出発しようとしたところ、馭吏が言うことに、これから先の道に人喰虎が出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでしょうと。袁修は、しかし、供廻りの多勢なのを恃み、馭吏の言葉を斥けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通つて行つた時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁修に躍りかかるかと思えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところだ」と繰返し吠くのが聞えた。その声に袁修は聞き覚えがあつた。驚懼の中にも、彼は咄嗟に思ひあたつて、叫んだ。「その声は、我が友李徴子ではないか？」袁修は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かつた李徴にとつては最も親しい友であつた。温和な袁修の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためである。叢の中からは、暫く返辞が無かつた。しのび泣きかと思われぬ微かな声が時々洩れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「如何にも自分は麗西の李徴である」と。袁修は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに女闘を叙した。そして、何故叢から出て来ないのかと問うた。李徴の声が増えて言う。自分は今や異類の身となつてゐる。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつ又、自分が姿を現せば必ず君に畏怖厭厭の情を起させるに決つてゐるからだ。しかし、今、図らずも故人に遇つたとを得て、塊の念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜惡な今の外形を厭わず、曾て君の友李徴であつたこの自分と話を交してくれないだろうか。後で考えれば不思議だったが、その時、袁修は、この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪もうとしなかつた。彼は部下に命じて行列の進行を止め、自分は叢の傍に立つて、見えざる声と対談した。都の噂、旧友の消息、袁修が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかつた者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後、袁修は李徴がどうして今の身となるに至つたかを訝ねた。草中の声は次のように語つた。

言記 山月 中島敦

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊つた夜の事、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から、頻りに自分を招く。覚え、自分は声を追つて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか遠く山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を掘んで走つてゐた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行つた。気が付くと、手先や腕のあたりに毛を生じてゐるらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となつてゐた。自分は初め眼を信じなかつた。次に、これは夢に違ひないと考えた。夢の中で、これは夢だと知つてゐるような夢を、自分はそれまでに見たことがあつたから。どうして、こんな事でも起り得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだろうか。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想つた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目覚めた時、自分の口は兎の血に溢れ、あたりに兎の毛が散らばつてゐた。これが虎としての最初の経験であつた。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。ただ、一日の中に必ず数時間、人間の心が還つて来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の内容を講んずることも出来る。その人間の心で、虎としての己の残虐な行のあとを見、己の運命をやりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤るしい。しかし、その、人間にかえる数時間、日を経るに従つて次第に短くなつて行く。今まではどうして虎などになつたかと怪しんでゐたのに、この間ひよといふと気が付いて見ると、己はほとんど以前、人間だつたのかと考へてゐた。これは恐ろしいことだ。今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中になつて埋れて消えて了つたろう。ちよつと、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い廻り、今日のように途で君と出會つても故人と認めることなく、君を裂き喰つて何の悔も感じないだろう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだつたんだらう。初めはそれを憶えているが、次第に忘れて了い、初めから今の形のものだつたと思ひ込んでいるのではないか？ いや、そんな事はどうでもいい。己の中の人間の心がすつかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。なのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐ろしく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐ろしく、切なく思つてゐるだろう！ 己が人間だつた記憶のなくなつて、この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上になつた者でなければ、ところで、己がすつかり人間でなくなつて了う前に、一つ頼んで置きたいことがある。袁修はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞入つてゐた。声は續けて言う。他でもない。自分は元來詩人として名を成す積りでゐた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至つた。曾て作るどころの詩數百篇、回より、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつて了う。ところで、その中、今も尚記誦せるものが數十ある。これを我が爲に伝録して載きたいのだ。何も、これに仍つて一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのもの、一部なりとも後代に伝えたいでは、死んでも死に切れないのだ。

